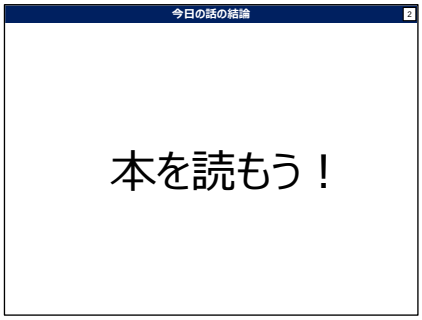
令和４年３月２４日
令和４年度　修了式

総合的な探究の時間を中核にすえた教育活動の推進に向けて

佐賀県立唐津西高等学校
校長　下村　昌弘

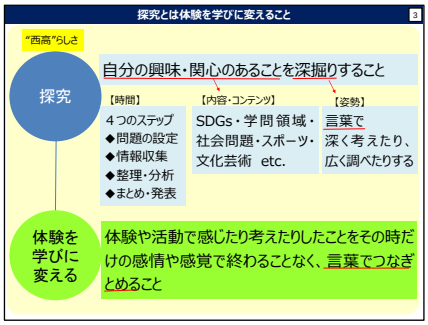
全校の皆さん、おはようございます。学校長の下村昌弘です。

令和４年度の修了式に当たり、今年度の総括と次年度の展望の意味を含めて話をしたいと思います。



今日の話の結論は「本を読もう」ということです。なんだそんなことかと思うかもしれませんが、まあ聞いてください。

読書を薦めることはどの学校でもやっていることで特段珍しいことではないかもしれませんが、私が皆さんに読書を薦める理由はちょっと変わっているかもしれません。その理由を今から順序だてて説明します。



まず、本校の「らしさ」についての確認からです。

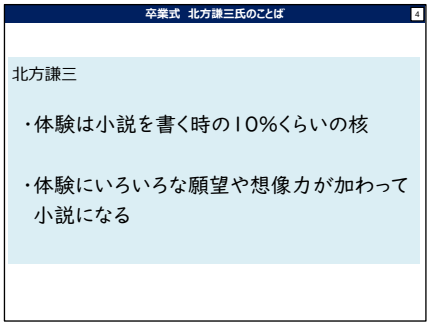
本校は総合的な探究の時間を中核に据えた教育活動を推進しています。これは総合的な探究の時間の４つのステップが大事であることはもちろんのことですが、そこで学んだ内容、考えた内容に加えて、そこでの学び方、つまり探究する姿勢が大事で、そういう探究する姿勢をこの西高生の基本的な姿勢にしたいということです。

探究とは自分の興味・関心のあることを深掘りすることです。それは言葉を変えると、体験を学びに変えるということです。

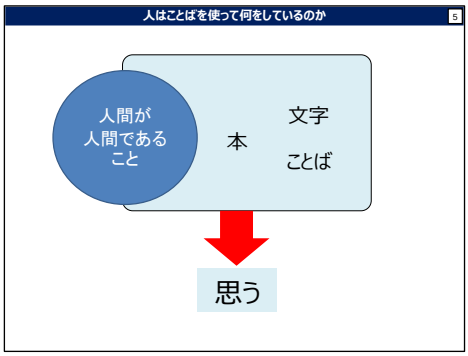
興味関心のあることとは、SDGs など現代的な問題でもいいし、国語や数学・理科など教科・学問的な分野でもいいし、スポーツや文化芸術活動でも構いません。

いずれにせよ、自分に一番しっくりいく分野にかかわっていろいろな活動・体験をして、そこで感じたこと・考えたことを一時の思い出や感情で終えるのではなく、言語化し、深く考えたり、広く調べたりすること、これが体験を学びに変えるということです。

体験を学びに変える、こうした探究の姿勢は大学に行こうが行くまいが、皆さんが生きていくうえでの大切なエンジンになります。

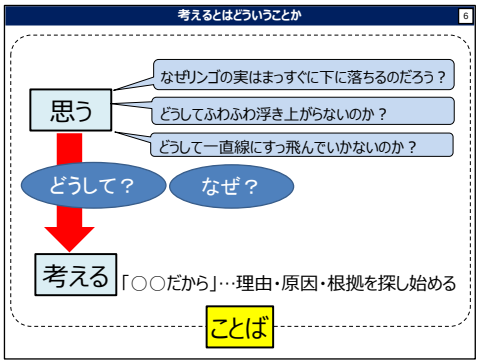


それに関して、３月１日の卒業式で、唐津にゆかりのある作家、北方謙三氏の話をしました。北方氏は「体験というのはたぶん小説を書く時の１０%くらいの核にはなっている。あとはその体験に、いろいろな願望や想像力が加わって小説になっていく」と言っています。

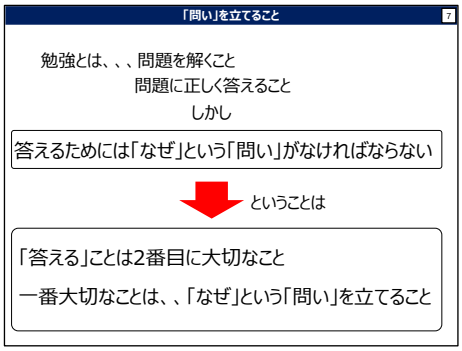


小説をはじめ本というものは文字、すなわち言葉でできています。言葉と文字を持っているのは人間だけです。言葉を集約したものが本であるなら、本は私たちが人間であることと切っても切れない存在ということになります。本にはぎっしり言葉が詰

まっています。
　では、その言葉で私たちは何をしているのでしょうか。それは「思う」ことです。私たちは日常、言葉で何かを思っています。



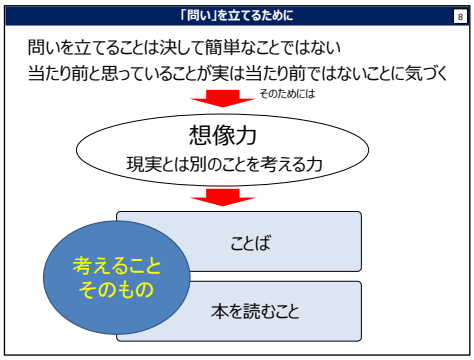
　「思う」とは「考える」ことの第一歩です。
　では、「考える」とは何をすることでしょうか。私たちはどんな時、単に「思う」ことから一歩踏み込んで「考える」ことをするのでしょうか。
　ここで１８世紀のイギリスの科学者アイザック・ニュートンの有名な話を引き合いに出してみましょう。真偽のほどはさておき、この話は皆さんもきっと聞いたことがあると思います。
　ニュートンはある時、野原で寝そべりながらそこに生えているリンゴの木を眺めていた。そこでふと次のように思ったのです。「なぜリンゴの実はまっすぐに下に落ちるのだろう」と。
　ふつうこんなことは思わない。なぜ彼はそう思うことができたのでしょうか。
それは彼に次のような「なぜ」が思い浮かんでいたはずだからです。「どうしてリンゴの実はふわふわ浮かび上がらないのか」「どうしてリンゴは一直線にすっとんでいかないのか」。
　それは「どうして」「なぜ」という疑問です。
　ニュートンにはふつうの人は思い至らない疑問が湧いたのです。よくそんなこと思ったよなと思いますが、とにかく、彼が「なぜ」と思うことができたのはリンゴの実が必ずしもそうならなければならないわけではないことに気が付いたということです。
　話を進めます。
　「なぜ」という問いがひとたび生まれたら、今度はそれに「〇〇だから」という答えが与えられなければなりません。その「〇〇」を求めて人は考え始めるのです。
この「〇〇」のところには、理由であったり、目的であったり、原因であったりすることが入る。これをひとくくりに根拠と言ってもいいです。
　この話で私が言いたいのは、「考える」とは「なぜ」と問い、それに「〇〇だから」と根拠を考えるということが一連の流れになるということです。言葉なしにはこの一連の流れは成り立ちません。



ところで、皆さんは勉強というものを「問題を解くことだ」と思ってはいないでしょうか。入試にしても定期考査や模擬試験にしても問題が与えられてそれに正しく答えられるかどうかで点数がつくのだからそう思うのは無理もありません。

しかし、実は勉強というのはそれだけではないということが少し分かってきたでしょうか。そもそも答えるためには、「なぜ」という「問い」がなければならないのです。ですから、「答えること」は言ってみれば２番目に大事なことであって一番重要なことは「なぜ」という「問い」を立てることだということになるわけです。

けれども、「なぜ」という「問い」を持つことが決して簡単なことではないこともニュートンの話は教えてくれています。



私たちはリンゴの実が落下することも机の上から消しゴムが落ちることも当たり前だと思ってそこに「なぜ」と問われるべき大事なことが隠されていることに気づきもしません。

この問題に気付くためには、私たちが当たり前と思っていることが実は当たり前でもなんでもないことに思い至らなければなりません。

では、そこに思い至るためには何が必要だと思いますか？

それは、、、、想像力です。想像力よってはじめて当たり前は当たり前ではないことに思い至ります。想像力とは現実とは別のことを考える力です。つまり想像力豊かな人ほど「なぜ」という「問い」をよりたくさんもつことができるのです。

そしてこの想像力にも言葉が決定的な役割を果たしていると思います。さあ、言葉、すなわち本の話に戻ってきました。

皆さんは本を読むときにいろいろなことを考えるでしょう。主人公が様々な事件に巻き込まれたりいろいろな経験をしたりする。それを読んで、ワクワクドキドキ、「こ

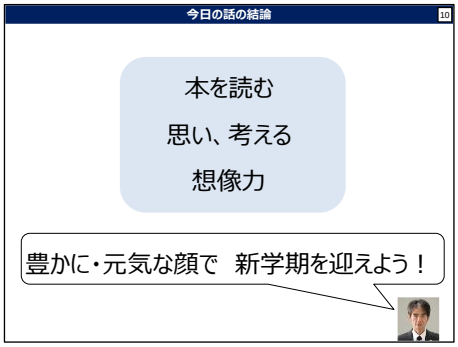
れはいい」「うわー、しんどそう」といろいろ考えるはずです。皆さんの生活が必ずしも現実のままでなくても全然かまわないことに気づいたからです。皆さんの想像力が刺激され、あれこれ考えているわけです。

本を読むことはこのように考えることそのものなのです。

私は大人であることの条件の一つは自分の頭でものを考えることができることだと思っています。このことはニュートンの話でも分かるとおり、それほど簡単なことではありません。何よりも若いうちに柔軟な想像力を養うことが大事なのです。

想像力に支えられた「考えること」が自分の生活を豊かなものにしてくれます。より深く思う、より深く考えることができれば生きることに幅や厚みが出てきます。

本を読むことがより豊かに生きることの入り口になることが伝わったでしょうか。



春休み、少しだけかもしれませんが、皆さんに自分の時間が戻ってきます。どんな種類の本でもいいから普段はなかなか取り組めない、まとまった読書に挑戦してみてほしい。それを面白いと思えば思うほど皆さんはいろいろなことを思い、考えるはずです。

そして、考えれば考えるほど、皆さんの毎日は想像力によって豊かなものになります。ものを考えることで、一段と成長し、より豊かになった元気な顔を新学期に見せてくれたらうれしいです。どうかよい春休みを！